掲載日:2022年01月09日,面名:BOAA00,記事ID:K2022010900000006200 (C)神奈川新聞社

著者の肖像

松本　和也

「文学と戦争」

存在を懸け筆を曲げた

「制約された状況で文学者がどう振る舞ったのか興味があった」＝横浜市西区の神奈川大みなとみらいキャンパス

戦時体制下の作家は何を書き、何を書かなかったのか。「文学と戦争」(ひつじ書房・7700円)を著した神奈川大教授の松本和也は、彼らが戦争協力に対する賛否とは別の次元で、現実社会との関わりを深めようとした切実さを読み取る。「それは、震災やコロナ禍に直面した現代作家の態度にも重なって見える」

570ページ超の大冊。しかし意外にも先行研究は多くない。個々の作家論で言及されることはあっても、戦時下の文学全般は「不毛な時代」で片付けられる傾向があったからだ。「戦争と関わった過去は悪だと捉えられがちだった」

しかし松本は、言論が大きく制約を受けた状況にこそ「作家は存在を懸けて芸術性を発揮しようとした」とみる。強いられた作家活動ではあったが、必ずしも作家性に乏しいわけでもなかった。そもそも「文学が現実世界の《事実》と無縁に展開されたことなどなかった」(本書)のだ。

作家による戦争表現は、総動員体制下の「思想戦」の武器となった。同じ前線からの報告でも、従軍記者による記事と従軍作家による作品とでは、着眼点も筆致も異なる。「作家の感性を読者も求めていた」

中で松本が挙げるのは、中国戦線に赴いた上田廣が現地の青年との交流を描いた報告文学「黄塵」だ。上田は当時の文芸誌に、戦争や政治から離れた一個の人間として交情が成り立つと語っている。中国人は「人間を信ずる」と。「上田自身は素朴にそう信じていたが、彼の意図とは別に、日本人が中国人を導く〝正しさ〟の実例として、戦争の正当化に利用された」

上田しかり、当時の作家は非情な戦場になお残るヒューマニズムに焦点を絞った。「理屈よりも実感だった」。もはや論理で戦争を批判も肯定もできない状況に追い込まれていた。

満州事変から日中戦争に至る時期、作家は「シフトチェンジ」した、と松本は指摘する。不要不急とされぬよう、戦争という「公共事業」に適応し、自らの社会性を誇示したのだ。「社会から存在意義が問われた文学者はどうしたのか、どうせざるを得なかったのか。当時の条件を冷静に検証し続けなければならない」(斉藤　大起)